



Title	江戸時代の鯰絵を中心として多角的視点から見た、古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷と社会的背景
Author(s)	
Citation	令和3（2021）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85595
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和3年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	すみかわ あつき 澄川 温喜	学部 学科	文学部 人文学科	学年	1 年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	飯倉洋一	所属	文学研究科		
研究課題名	江戸時代の鯰絵を中心として多角的視点から見た、古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷と社会的背景				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

① 研究目的

この研究の目的は、古代から現代に至るまでの人々の鯰観がどのように変化してきたのかということを通史的にまとめることである。民俗学的に鯰を捉えた研究は数多くある。ただ、古代から現代までという視点で一貫してまとめられた研究は見つからなかった。なので、本研究によって古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷をまとめるということには意義があるのではないかと考えた。

② 研究方法と研究経過

まず、研究方法についてである。本研究の研究方法は大きく分けて3つである。1つ目は、文献に関連することである。具体的には、文献の精読、そこから得られた情報の正確さの検証、情報の整理である。2つ目は、博物館展示の見学である。具体的には、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館特集展示“鯰絵のイメージーション”に足を運んだ。博物館展示では、実物の鯰絵を見ることができた。実物の鯰絵からは、政治、災害、飢饉などへの恐怖や不安の中必死に生き抜こうとする当時の江戸庶民の力強さのようなものを感じることができた。また、そのような世の中をユーモアで笑い飛ばそうとする江戸庶民独特の思想にも、鯰絵という当時の一枚摺りの民俗版画を通し、時代を経て少しでも触れることができたような気がした。貴重な体験ができたとともに、実物を見てみるということの重要性を感じた展覧会であった。さらに、展示されている絵の横に添えられた説明文からは、鯰絵の基本的な見方を学ぶことができた。文献からも学ぶことができるが、文献だけでは得られなかった情報を新たに得ることができた。文献では鯰絵を包括的に捉えているものが多く、いくつかの分類分けは行われていても、一枚一枚全てに説明を加えるということとはされていない。しかし、今回の展示では（黄雀文庫所蔵の鯰絵特集展示だったので、すべての鯰絵が展示されていたわけではないが）、分類分けと共に一枚一枚に細かい説明が加えられており、一枚一枚細かく検討するという新たな視点を得ることもできた。3つ目は、聞き取り調査である。具体的には、茨城県鹿島神宮で聞き取りを行い、神職の村山様からお話を伺った。事前にこちら側が用意していた質問に快くお答えしていただき、鹿

島神宮の由来などについて教えていただくとともに、文献の紹介もしていただいた。紹介していただいた文献は、学術調査報告書Ⅷ『鹿島信仰の諸相』（茨城県立歴史館）、特別展『鹿島信仰―常陸から発信された文化―』（茨城県立歴史館）の 2 冊である。この 2 冊の文献は大学図書館で見つけれず、一般にもほとんど出回っていない文献である。その内容は、鹿島信仰の分布、広がり調査したものを始めとし、私が求めていた情報を多く含んでいた。このことは、今までの私のなかでの鹿島神宮への認識を刷新することとなり、来年に向けての新たな考察テーマを与えてくれることとなった。鹿島神宮への遠征がなければ、少なくとも本研究期間中にはこの文献に出会うことは無かったであろう。さらに、村山様には境内の 1 部も案内していただき、本当にお世話になった。

次に、研究経過についてである。最初は、とにかく多くの文献を読んだ。それによって、鯰絵をはじめとする、民俗的領域における鯰の立ち位置に対しての理解を深めていった。というのも、本研究を始めた段階で、鯰絵を始めとして、民俗的な分野での鯰に対する私の知識はほぼ皆無に等しかったからである。新たな情報を得ると、それに伴って新たに調べることが増え、読まないといけな文献が増えるということがよくあった。なので、文献精読は最後まで終わりに至ることがなかった。また、文献精読を行う中で、いくつかの疑問点も生じてきた。当初は、古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷をまとめることで本研究は終わりにしようと考えていた。そこで、古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷と社会背景をまとめ、文献精読によってその疑問に対する理解を深める中で、それらの疑問点についても自分なりに考察してみることにした。考察を加えた疑問点の中で、本研究内では“鯰絵の先例と、それが安政大地震の鯰絵に与えた影響、安政大地震の独自性”ということについて記述することとする。本研究は、古代から現代に至るまでの人々の鯰観の変遷をまとめたものと、私自身の考察の 2 段階構成となっている。

③ 研究成果

最初に断っておくが、本研究での“安政大地震”とは安政 2 年 10 月 2 日（1855 年 11 月 11 日）午後 10 時ごろ、関東地方南部で発生した M7 クラスの地震のことを指すものとして用いている。また、本研究での“鯰（ナマズ）”とは、学名 *Silurus asotus* Linnaeus のマナマズ（①）を指している。以下では、古代から現代までの人々と鯰との関わりについていくつかの視点からまとめている。ここでは、古代、中世、近世、近現代など、時代ごとの変わり目については厳密な境界線を設けていない。なぜなら、本研究の最重要点は人々の鯰観についてであり、厳密な時代区分はそれほど重要ではないからである。また、関連する事項であれば、時代区分が異なっている場合でも一括りにしてまとめている場合がある。ただ、得られた知識は莫大であり、全てを書こうとするとページ数が増えすぎてしまうことから、時代ごとに変遷が見出せること、ある時代、地域に特有で特徴的、重要だと考えることのみ記載している。

古代（太古も含む）

・食と鯰

古代には、一部の地域を除き、鯰は食用と捉えられていた（③,p19）。このことは、考古学の発掘調査によって、貝塚から鯰の骨が発見されたということが証明している。一部の地域とは、神話や伝承上ナマズを神聖視し、ナマズを食べることを禁忌とする地域のことである。これらの地域は、後に述べる阿蘇信仰との関わりから、主に九州に集中している。また、考古学的視点から、当時のナマズの分布についても、以下のようにある程度明らかになっている。後期更新世になって日本列島が大陸から切り離されてからは、九州、四国と、フォッサマグナ以西の本州に生息していたと推定されている

(④,p387)。遺跡からのナマズの出土は、九州と本州の縄文早期の洞穴や貝塚が最古となる(④,p388)。縄文晩期の奈良県橿原遺跡からは、ナマズとコイが報告されており、滋賀県、奈良県には縄文時代以来、鯰が分布していたことは間違いのないであろう(④,p390)。日本海側の縄文早期の遺跡には出土例がなく、縄文前期になって福井県鳥浜貝塚や富山県小竹貝塚から、縄文中期以降には石川県上山田貝塚、石川県真脇遺跡からナマズが出土し、更新世以来、日本海側にも分布していたことがわかる(〃)。さらに……古代になって浜名湖周辺まで分布域を広げていたことが推定される(④,p394)。奈良・平安時代に静岡県浜名湖周辺まで東進したナマズの生息域が、次に拡大するのは江戸時代である(〃)。このように、古代においては主要なたんぱく源とされてきた鯰であるが、時代を経て仏教の伝来に伴い、肉食が禁止されるようになる。本来、日本の食についての禁忌は、仏教の殺生禁断思想による影響が大きく、天武天皇 4 年(675) 4 月 17 日に、「肉食禁止令の詔」が発せられたのが禁食を法律化した初めである(④,p160)。『続日本紀』などには殺生禁断の令がみられる(③,p279)。奈良、平安時代になると、表向きには魚を食べることも禁止された(〃)。1126 年には、殺生を禁じ、諸国から集めた漁網を焼いた(〃)。しかし、仏家でも干物にした魚は食べていたし、魚の禁食に関しては表向きであって実際には食べられていたと考えられている。このことは、『日本三代実録』の貞観 8 年の条に、旱魃の時に京都でナマズを食べたことが記載され、平安時代には食用にしていた(④,p99)ということからも分かる。もっともこれは旱魃という非常事態の場合であるので、日常的にどうであったのかということについては別途検討する必要があるであろう。ここで、『今昔物語集』における鯰の説話についても触れておく(⑤,p206~208)。魚に関わる説話では、“物言う魚”という 1 つのテンプレートが存在し、これは鯰においても例外ではない。この説話もそのテンプレートに当てはまるわけである。こういった形の説話では、人間の姿に扮した魚が自らの危機を人間に伝えようとする。それによって魚は助かろうとするわけだが、多くの場合人間はその訴えを無視し、その結果魚は死んでしまうこととなる。死んだ魚の腹の中に、人間が与えた食べ物が入っていたりすることから、人間ではなく魚であったと正体がばれるわけである。人間に扮した魚との約束を破り、魚を殺してしまった結果、最終的に人間に罰が当たるとするのが基本的な流れである。(④,p95)には、昔話の一般的な、「しかも由緒ある」様式として、「小賢しく且つ不注意なる者は災いを受けて死に、愚直にして靈異を畏るる者が助かる」とある。今昔物語集の話における罰とは、魚の骨がのどに刺さって死んでしまうということだが、これは鯰を食べてしまった結果である。これは時期的に殺生禁止とつながるし、今昔物語集は仏教説話でもある。このことから、この説話は“物言う魚”という括りに留めておくだけでは不十分であるように思われる。この説話は、当時鯰を食べることが禁止されており、食べると罰が当たるから食べるなということを伝えようとした説話なのではないだろうか。

・地震と鯰

日本語には、地震を表す言葉がない(⑥,p135)。なぜ地震を表す語が存在しないのかについては、太古の日本人にとって、地震はそれほど認識されていなかったからだと考えることができる(⑥,p139)。太古の人々の生活にとっては、地震の被害は深刻ではなかったのであろう。倒壊することで人々を下敷きにして死に至らしめるような家屋は存在せず(⑥,p140、141)、二次被害である火災の発生も起こらなかったからである。また、津波に関しては、地震との関連性は認識されておらず、それ自体独立した現象であると捉えられていたと考えられる。地震の記事が日本の歴史に初めて現れるのは、「日本書紀」の允恭天皇 5 年(西暦 416) 7 月 14 日の条で、「五年秋七月丙子朔己丑。地震。…」と書いている(⑥,p136、⑦,p340)。私が参照した文献では、この「地震」を「ナキフル」と訓読している

(⑦,p340)。読み方は「じしん」ではないが、この時には、地震という現象が認知されていたのだらうと推測できる。「ナキフル」の解釈に関しては文献(⑥,p136~138)を参照していただきたい。一方、同じ日本書紀であっても、年代の経った天武天皇 12 月の記述では、「是月。筑紫國大地動之。…」と書かれている(⑧,p347)。ここでは、「地動」に対して「ナキフル」という訓読はされていない。このことから、この短期間で地震に対しての記述の仕方(認識)が異なっていることが分かる。また、推古女帝の治世には、初めて「地震祭り」というものが行われた(⑤,p105)。この頃には、地震を神の怒りや天譴と考える思想が芽生え始めていたのであろう。しかし、この祭りによってどのような神が祀られていたのかということは明らかになっていない(㍷)。また、地震と鯨の関連性を見出せるようなものは、次の項目で述べる海津阿蘇神社の説話を除いて発見できなかった。10 世紀になると、地震とそれに伴う他の自然現象の解釈は、なかば哲学的ともいえる占星術や易学とますます密接に関連するようになった(⑤,p104)。それは中国ではすでにかなり複雑化し、日本では陰陽道という公式の学問にまでなった(㍷)。陰陽師は地震とその前兆を分析し、その見解を帝に奏上した(㍷)。その報告では、「火神動」とか「龍神動」といった言葉で地震を分類している(㍷)。「火神動」からは、地震の発生とともに、二次被害としての火災が発生していただらうと推測でき、火災の要素が強いときにはこの書き方が用いられたのではないだらうか。一方「龍神動」からは地震と龍が結び付いていたことが窺える。地震と龍の結びつきについては確実に存在していたのだが、それがいつから結びつくことになったのかということは分からない。ただ、この時には既に結びついていたのだらうと推測できる。龍と地震の最初期の結びつきには、海外からの影響があったのだらうと私は考える。

・神話、伝承の中のナマズ(主に阿蘇神話)

阿蘇神話については、既に多くの研究が行われている。阿蘇神話の内容について、詳しくは(⑨,p21~28)を参照していただきたい。この神話では、稲を植えたが、なぜか本当の米ができなかったということから、最終的にナマズを祀っている。また、それと同時に、ナマズを取ることを固く禁じたという。これによって、阿蘇神社の氏子たちは、明治維新の頃までナマズをとるものも食うものもいなかったという(⑤,p210)。一方で、海津阿蘇神社の地域に広まる民話は独自性を抱えている(⑩,p35、36)。その独自性は2つある。1つ目は、上で紹介した阿蘇神話では建御龍命に殺される大鯨が、建御龍命を助けるという立ち位置で登場することである。2つ目は、「大昔、地震が起きるのは、地中の深くに、大きな鯨が棲んでいて、時々体を動かすので、地震が起きるのだと信じられていた」(⑪)とあることである。上で述べた阿蘇神話では、地震と鯨の関係については全く触れられていない。この2つ目に関しては、その信憑性がとても重要である。というのも、地域としての独自性を示すために、意図的に創り出された可能性があるからである(⑩,p36)。日本での、地震を起こす存在の変遷は、龍→鯨であるというのがほぼ定説となっている。そのなかで、大昔の海津地域で地震を起こす存在が鯨であると考えられていたとなると、それは定説を覆す可能性を持っているからである。鯨を神聖視していたというのはほぼ間違いないことだらうが、それが地震と結びついていたということになると話は変わってくる。私自身の考えでは、この民話は偽りであると考ええる。なぜなら、九州の他の地域でこの結びつきは見られないし、そもそも海津地域だけで独自の阿蘇神話が成立しているということもあまり納得がいかない。なので、この民話が教育委員会の書籍であることから、鯨によって地震と鯨の結びつきがより定着した近現代の日本人によって、後に創作されたものであると考える。このように、阿蘇神話は地域ごとに若干の差異を示すが、一貫して以下のことが共通している。それは、ナマズを神聖視するということである。この神聖視の観念から、氏子が鯨を食べないという現象が生じてくる。しかし、考古学的には、九州地方の貝塚から鯨の骨が発見されており

(④,p388、389、393)、実際には鯰が食べられていた可能性が高い。鯰の骨が発見された地域には当時阿蘇信仰が分布していなかったかもしれないが、神話の信憑性については慎重に検討する必要があるようである。そもそも、神話とは後の世になってから描かれたものであり、神話が取り上げている、文字すら無かったような当時の状況が正確に反映されているということは考えにくい。このように考えると、阿蘇信仰の神話は、後の阿蘇信仰に与えた影響が強く、その部分を検討する必要があるように思われる。神話によって鯰の神聖視、禁食の観念が当該地域の人々に浸透するようになり、そうやって初めて禁食の文化が誕生したのではないだろうか。阿蘇神話の完成→鯰の禁食の始まりといった関係である。もっとも、阿蘇神話で取り上げられている地域で、鯰が神聖視されていたことは間違いないであろう。鯰の神聖視は琵琶湖周辺地域にも浸透している(⑫,p178 など)。ただ、阿蘇神話とは異なり、琵琶湖周辺地域では、固有種のイワトコナマズを始めとして鯰が食されてきた(④,p65、⑬)。ナマズを神聖視するという観点は両地域に共通するが、そのうえで琵琶湖では神様からの恵み、つまりありがたいものとして鯰を食しているように感じる。また、九州では、“ナマズハダ”の治癒を鯰の霊験に祈り、寺社への鯰絵馬の奉納、境内の池や付近の川に鯰を放すといった信仰の形態も多くみられる。ナマズハダと鯰絵馬の関係は日本各地で確認されているが、(⑫)から考察してみると、特にその信仰が九州に偏っていると言える。鯰絵馬の奉納に関しては近世的であると言えるが(④,p172~175)、九州の鯰信仰に関連してここで述べておく。鯰絵馬に描かれている鯰には白い鯰がいるが、それは白ナマズと呼ばれる皮膚病に関連していると考えられる。鯰絵馬の観点から見ても、九州では主に、ナマズを神聖なもの、神の眷属として捉え、大切に扱うという傾向がみられる。その主たるものが阿蘇信仰、鯰絵馬、『豊玉姫宮縁起』『鞍置鯰』の話などである。阿蘇信仰と関連した九州の人々の鯰の神聖視ということに関連して、もう1つ興味深い話がある。それは、『後漢書倭伝』に、「會稽海外有東鯰人 分爲二十餘國 以歳時來獻見云」と書いてあることである(⑩,p49)。注目すべきは下線を引いた部分である。“鯰”という字は“なまず”と読める(Ⅱ)。すると、“東鯰人”という部分は、少なくとも“なまず”を重んじる東方の人と解釈できるであろう(Ⅱ)。民俗学者の谷川健一は、その著書『古代史ノオト』の中で、「この東鯰人は、ナマズをトーテムとする人種と解することができる。それらの住む国がどこであるか不明とされているが、強いてそれをわが列島の中に求めるとするならば、九州の阿蘇山の周辺をおいて他にはない」と述べている(⑩,p50)。

中世

・食と鯰

上で述べたように、古代においては、仏教の観点から、表面上鯰を取って食べることが禁止されていた。しかし、室町時代になると、仏教思想による漁獲や魚食の禁制が弱まった(③,p280)。室町時代の伊勢貞頼による『宗五大艸紙』には「かまぼこはなまず本也、蒲の穂を似せたる物なり」とあり、当時の蒲鉾の材量はナマズを搗り身にしたものが多かったようである(④,p99)。また、応仁の乱の頃には、京都に魚市が存在していたらしい(③,p281)。室町後期、一条兼良の『尺素往来』には、「このあいだの霜雨で美味の食物得難いが、済々尋ね出したところ列ねた魚の中に鯰あり」とある。このことから、鯰が美味とされていたこと、一条家という高位の貴族でも鯰を食していたことの2つが推測できる(⑭,p199)。

・瓢箪鯰

瓢箪鯰の構図の最初のものは、如拙による「瓢鮎図」であると言えるだろう。瓢箪と鯰の結びつきが持つ意味については、本研究で言及するつもりはない。このことについては、C・アウエハント氏が、

その著作⑤において、猿や河童との関連性にも留意しながら民俗学的に考察を加えている。なので、この研究の主要なテーマを外れてまで私が考察を加える必要性を感じなかったからである。ただ、瓢箪鯰によって表現しようとしていることの変遷については言及しておきたい。如拙の「瓢箪図」については、一般に禅の公案を描いたものとされている（⑤,p417）。鈴木大拙によると、「真理あるいは実在、あるいは神と言ってもよいであろうが、これらを概念の知性によって捉えようとする時の、捉えにくさ、あるいはつかまえどころのなさ、瓢箪で鯰をつかまえようとするのと同じである。」ということである（Ⅱ）。しかし、禅の世界では、理を超えた理によって捉えればこのことが可能になるというのである（Ⅱ）。一方で、大津絵の瓢箪鯰では、表現しようとしていることの1つとして、“浅はかな猿知恵”ということが挙げられる（⑤,p154）。このことは、瓢箪によって鯰を抑えようとしている存在が猿であること、本来不可能なこと（瓢箪で鯰を抑えるということ）をしようとしていることから分かる。そこに、禅の公案の要素はもはや存在していない。瓢箪図の場合は、新様（禅の公案）を表現しようとする明確な意思のもとに描かれたものであるが、大津絵の場合、その絵から何を考えるかということは買い手の自由であったのではないだろうか。そもそも瓢箪図は將軍義持の命によって描かれた一点物であるのに対し、大津絵は基本的には商売目的で大量に描かれたものである。その絵によって表そうとするものの重みに違いが生じてくるのはもはや必然的であると言えるであろう。大津絵においては、瓢箪鯰の構図が庶民向けに大衆化されたのである。この機会に、江戸時代の鯰絵における瓢箪鯰の構図についても触れておくこととする。江戸時代の鯰絵も、基本的には庶民に売ってお金を得るということを目的としている。そのために様々な工夫が施されるわけであるが、鯰絵における瓢箪鯰の構図はユーモアの表れであると言えるだろう。禅の公案、浅はかな猿知恵という要素は双方とも見出せない（例外あり）。ただ単に鯰一瓢箪が結び付いてさえいれば、後はそこに作者の意図した何かの意味が含まれているかどうかは問題ではないといった感じである。実際に鯰絵では擬人化鯰の着物の柄が瓢箪という構図がある。この構図においては、もはや瓢箪と鯰が結び付いてさえいれば良いといったことを感じさせる。ただ、鯰絵においては、瓢箪鯰の構図が多くあることから、この構図は効果的であったのだろうと考えられる。なぜ、何か意図するものが無くても、鯰絵におけるこの構図が効果的であったのかについては、人々の中に既に鯰一瓢箪という意識が（大津絵などの影響から）ある程度定着していたからであろう。一度この意識が定着してしまうと、後は何か意味を持たせるということではなく、ただ単にユーモアとして採用するということが効果的になる。現代でも、瓢箪や地震と言ったら鯰というイメージを持っている人は多くいると思うが、それについての背景や意味などを知っている人はあまりいないのではないだろうか。ある程度人々の意識に浸透してしまえば、何の検討も加えることなく、過去の先例を言われた通りに受け取るようになっていくのではないだろうか。なぜそうなるのかは、先人と周りがそう信じているからである。こういった構図を生み出すのに肝心なのは、1番最初に人々に浸透するまでなのである。コロナ禍のアマビエの様に、形は多少異なるが、現代人のなかにも、非常事態に過去の民俗信仰が蘇ることがある。この場合においても先人、周りの人が信じているからといった理由で無批判に受け入れるのである。また、鯰絵には人間でも猿でもなくエビスや鹿島大明神が瓢箪で鯰を抑えるという構図が多くある。鯰絵のこの構図では、エビスや鹿島大明神を無気力なものとして捉えている。この構図においては、やっても意味のない無駄なことをするという“浅はかな猿知恵”という意味が復活しているのである（④,p137）。なぜなら、すでに安政大地震は起きてしまっており、エビスと鹿島大明神がそれを抑えることができなかったという事実があるからである（Ⅱ）。その他、近世における瓢箪鯰の構図は、池大雅など著名な画家の画題になっていることがある（⑤,p221、228、232 など）。瓢箪鯰の構図は国芳や池大雅などの著名な画家の興味を引くほどの構図でもあったわけである。明治の鯰絵においては、瓢箪鯰の構図は

もはや見られなくなっている。しかし、鯰-瓢箪という結びつきは現代人のなかにも脈々と受け継がれているのではないだろうか。現代において、瓢箪鯰を模した民具や、瓢箪鯰のカラクリ軸を用いる大垣祭りなどがある(④,p101) ことから分かる。なぜ瓢箪鯰の構図がこれだけ根強く生き続けるのかということについては、1つの要素として、鯰と瓢箪の見た目の類似性が挙げられるだろう。扁平な形、体表が滑らかで頭部が大きい鯰は、瓢箪の形、特徴との類似性を感じさせる。長年にわたって培われてきた民俗観の裏にある鯰と瓢箪の結びつきに関しては、⑤に詳しく述べられている。ただ、瓢箪鯰の構図は時と場合によって意味するものが異なっているということには留意する必要がある。

・大津絵

大津絵とはいったいどういったものなのかということについては、私は主に(④,p126,127)、(⑤,p146~157)を参照した。大津絵が鯰絵に与えた影響は大きかった。このことは、大津絵の主要な画題のいくつかが鯰絵に反映されていることから分かる。例えば弁慶鯰の構図は、弁慶だけを取てみると地震との関連性は見出せない。しかし、鯰絵においては、弁慶の7つ道具を、地震によって儲けた人々の商売道具に置き換えることでユーモアを醸し出している。ただ、これが弁慶である必要性はないので、そこには大津絵の影響が見出せる訳である。また、鯰絵の主要な絵描きである国芳派の歌川国芳が大津絵に関心を持っていた(⑭,p40~51)ということも、大津絵が鯰絵に影響を与えた理由のひとつであろう。また、時期的に大津絵は既に流行しており、そのことは江戸の絵描きにも伝わっていたはずである。このことは、国芳が大津絵の構図に興味を寄せていたことから窺える(Ⅱ)。国芳が大津絵に興味を寄せていたということは、大津絵の画題が自然と鯰絵にも反映されるということに繋がる。さらに、大津絵はお土産として購入されるということが主であった(⑤,p147)ので、それを持ち帰ることによって、大津絵が全国的に分布するということも起こり得るのである。このことによって瓢箪鯰の構図は全国的に意識されていくようになったのではないだろうか。では、そもそも大津絵でなぜ瓢箪鯰という構図が生まれたのかということに関して、少し私の考えを述べておく。1つは、瓢箪図の影響であろう。近江国追分と京都退蔵院は地理的にも近いと言える。ここでの近いというのは、影響を与えるには十分な距離範囲内(明確な定義を設けているわけではないが)であるということである。もう1つは、琵琶湖の影響があると考え。琵琶湖周辺では鯰を弁財天の眷属と考え、神聖視する考え方がある(⑫,p176、178)。また、鯰とも関係して、竹生島の縁起も存在する。さらに、琵琶湖には、琵琶湖水系固有種であるビワコオオナマズ、イワトコナマズが棲息している(⑬)。琵琶湖周辺において、鯰に対しての民俗的結びつきは強かったのである。これらのことから、大津絵において瓢箪鯰という構図が引き継がれることの必然性が感じられる。

近世

・鯰絵

鯰絵に関しては、本研究のタイトルに“江戸時代の鯰絵を中心として”とあるように、特に重要視して多くの文献を読んだ。それによって、鯰絵に関してはかなり多くの知識を得た。しかし、それをここに記述しても、多くは既に他の研究者が発表した内容を記述するだけになってしまう。なので、ここでは、そこで得られた知識の中でも、鯰絵に対して特に私が重要であると考え基本的な見方について簡単に述べて終わることとする。その見方とは、鯰絵の中の両義性である。この両義性を考慮するには、当時の江戸の社会背景に触れておく必要がある。当時の江戸庶民は飢饉や災害、安定しない政治、黒船来航による海外からの危機など、不安定な社会を生きていた。なので、安政大地震に対しては、日常の破壊や死の恐怖とともに、天譴や世直しという思想が同時に生じることとなったのであ

る。実際に、この地震では、金持ちは家屋の倒壊や火災によって財産を失うなどの損害を被り、逆に土木業に携わる小商人や労働者などは、家屋の修復などによってお金を儲けることができた(⑤,p86)。貧富の差という問題が多少は改善され、富の再分配が行われることとなったのである(⑤,p121)。この構図は、鯰絵に頻繁に登場する。C・アウエハント氏の言葉を借りると、鯰は破壊者であると同時に救済者でもあるのである(⑤,p230、293)。これが鯰絵の中の両義性であるが、それを理解するには当時の社会背景を理解する必要があるのである。鯰絵には、地震の被害を伝えようとする速報性重視のものや御守としての機能を果たすものもあった。しかし、基本的には、多分にユーモアを含みながら、破壊者(懲らしめられる)と救済者(歓迎される)としての鯰を描いている。鯰絵に頻繁に登場する諸要素(鯰、雷神、鹿島大明神、エビス、要石、瓢箪など)の結びつきについては、C・アウエハント氏の著作⑤を参照していただきたい。そこには、決して偶然で済ますわけにはいかないような、時代を経て人々の中に培われてきた、民俗信仰に裏付けられた関連性が見出せるのである。

・食と鯰

江戸時代において、鯰は、食材のひとつと認識されてはいたが、人気があったわけではなく、高級魚でもなかった(⑭,p203)。このことから、室町時代後期とは、食用の鯰に対する捉え方が変化していることが分かる。古代と比較してみると、次のように考えられる。古代の人々と比べて江戸の人々は食のレパートリーや調理方法が増えていたはずである。なので、鯰は、その中でも主要なレパートリーのひとつとして生き残るほどの美味ではなかったということだろう。また、江戸時代には本草学が発展した。それに伴い、本草本には鯰料理の禁忌、タブー、食用などについて書かれている。近世の食と鯰の関係について、詳しくは(⑭,p199~205)、(④,p99、100)を参照していただきたい。

近現代

・鯰絵

近代の鯰絵は、新時代のエリートたる官員諷刺画であった(⑭,p96)。その代表的なものは明治十年三月二十四日に創刊された時局諷刺週刊誌『团团珍聞』に数多く描かれた(〃)。西南戦争が終わると、戦争による財政難で政府が官員の人員整理を行った(〃)。「鯰」の人べらしということで、「地震」という言葉が「人員整理」を意味するものとして流行したのである(〃)。近代の大地震においても、鯰絵が登場するということはあった(⑭,p104)。しかし、地震での鯰絵においても、江戸期とは異なっており、何かを諷刺している。そもそも数も少ないのであろうが、鹿島大明神、鯰、要石、瓢箪のつながりを描いたものは見つけられなかった。江戸期とはそもそも表現しようとしていたことが異なっていたのであろう。また、爆発的な流行も見られなかった。江戸期の鯰絵と社会背景は異なっており、“地震と鯰の結びつきを信じるか、ユーモアとして受け入れる基盤が人々の中に整っていなかった”こと、“地震に対しての世直しの捉え方が消えていた”ということが原因なのではないかと考える。つまり、負の側面のみが残ってしまったということである。現実的には、鯰と地震に関連性などないと思われるかもしれないが、実際はそうでもない。東北大学の畑井新喜司博士の研究では、地震と鯰との関連性が明らかにされている(⑥,p17~22)。鯰は地電流を敏感に感じることができ、それが地震の予言につながることもあるということである(〃)。『安政見聞誌』などに、地震発生前の鯰の異常行動についての報告が残されているが(⑥p16、17)、これらのことは真実であったと考えられるのである。阪神淡路大震災の前にも、鯰の異常行動はいくつか報告されていたらしい。その他にも、地震と動物の異常行動については数多く報告されている(⑥,p23~51、⑭,p147)。また、鯰絵ではないが、阪

神大震災の後には“瓦版なまず”が発行され、『サザエさんたちの呼びかけ：阪神大震災・瓦版なまず 集成 1998—2008』（⑩）として出版されている。この瓦版は、内容的には鯰と関連のないものであったが、鯰と関連させて震災の記録を後世に残すということはとても重要であると考え。私の中で安政大地震はとても印象的であるが、それは地震そのものによってではなく、鯰絵によってである。鯰絵が描かれていなければ、安政大地震というものを知らなかったかもしれない。地震の記録を後世に残し、伝えていくというのは、例えそれが研究の対象という形であっても大事なことなのではないだろうか。

・食と鯰

一般的ではないが、今でも鯰を食べている地域はある。琵琶湖沿岸では、琵琶湖水系固有種であるイワトコナマズが美味として食されている（④,p65、⑭）。一方で、阿蘇信仰が浸透している地域では、現在でも鯰を食することを禁忌とする氏子が存在する地域もある。その他にもいくつか例があるので、近現代の食と鯰の関係については、（⑭,p206~210）、（④,p100）を参照していただきたい。

・鯰をモチーフにした品々、ゆるキャラ、町おこし

現代では、鯰に関連する歴史上の神話や伝承、民話、美術作品などにゆかりのある地では、それを活用した鯰の商品が販売されているところがある。その地域の人々が依然としてその伝承などを信じているかということはもはや関係がなく、商業用に利用されているように感じる。聞き取り調査で現地に足を運んだ鹿島神宮でも、鯰、鹿島大明神、要石、地震にちなんだ“自信守り”という御守が売られていた。その他の例に関しては（④,p108~119）を参照していただきたい。

④ 考察

ここでは、大きく分けて“鯰絵を主とした、先行する 3 つの地震と安政大地震の比較—なぜ安政大地震の鯰絵があれほど流行することになったのか”、“善光寺、小田原、安政東南海地震が安政大地震の鯰絵に与えた影響”の 2 つについて考察する。

まず、前者についてである。比較の対象とするのは、善光寺地震（弘化 4 年 3 月 24 日）、小田原地震（嘉永 6 年 2 月 2 日）、安政東南海地震（安政元年 11 月 4、5 日）の 3 つの地震である（①）。これらの地震は起こった期間が近いことに加え、前 2 つの地震は鯰絵の先例である。安政東南海地震においては、同じ江戸で起こっているという特徴がある。鯰絵の印象は安政大地震が強いが、地震の後に鯰絵が描かれるというのは、安政大地震が初めてではなかったのである。その先例として、天正地震（天正 13 年 11 月 29 日）、善光寺地震、小田原地震が挙げられる。天正地震の鯰絵については、この時に描かれた鯰絵が見つかっていない（④,p127）ので、信憑性が低いと判断した。なので、ここでは考慮していない。なぜ、善光寺地震以前に、鯰絵に限らず大々的な地震絵が描かれなかったのかに関しては、C・アウエハント氏の言うような解釈学的アプローチしかできない（⑤）。解釈学的アプローチによって、私が考えることは以下の通りである。まず、地震という現象を絵に描き、それを人に売るには、地震を負の感情で捉えるだけでは成功しないということが挙げられる。地震を負の感情で捉えるだけでなく、肯定的にも捉えるということは異例であり、その特殊なパターンが当時の江戸庶民には当てはまったということである。逆に、それ以前にはそういった考え方が無かったとも考えられる。また、それ自体目に見えず、体感することしかできない地震という現象を絵画として表現するには、何かを媒介として表現する必要がある。ここまでして、庶民に売るための地震絵を描こうという発想は、普通なら生まれないだろう。これは、鯰絵に限らず地震絵が大々的には描かれてこなかった

理由として考えられる。地震を表現した絵では、一般的には火災や倒壊する建物によって地震が表現されている。一方、鯰絵では、鯰を媒介として地震が表現されている。このことによって、地震への様々な受け取り方や感情を、鯰に対しての接し方を通して実際に絵に描いて表現することができるようになった。火災や、倒壊する建物によっての表現では、地震に対しての人間の抵抗感情を実際に絵に描いて表現するということは難しかったと考えられる。鯰絵は、地震に対しての、人間側のささやかな抵抗としても読み取ることができる。では、なぜ善光寺地震で鯰絵が描かれることになったのかについては、今となっては確認のしようがない。ただ、善光寺地震の際に国輝が描いた鯰絵は、そもそも庶民に売るためのものではなかったのかも知れない。国輝が自らの好みで描いたというだけかもしれない。善光寺地震の鯰絵が、国輝作のものしか見つかっていないということも、このことの根拠になるだろう (⑭,p240)。また、当時は鯰と地震の結びつきが広まりつつあった時期とも考えられるので、そういった状況の中で、鯰と地震という構図が生まれることになったのかもしれない。しかし、鯰絵は描かれたが、善光寺、小田原地震で鯰絵が安政大地震ほどのブームになることは無かった。なぜ安政大地震ほどのブームにならなかったのかということに関しては、3つ考えられる。1つ目は、先ほどから述べているように、国輝が個人の好みで描き、そもそも人々に対して売ろうという意思があまりなかったということである。2つ目は、江戸庶民に、これらの地震に対しての認識がそれほどなかったということである。善光寺地震の鯰絵が江戸で描かれた可能性が高い (⑭,p240) とすると、仮に売られたとしても、それは江戸においてであっただろう。自分たちの住む地域とは異なった場所で発生した地震絵が、江戸で流行するということは普通に考えてあり得ないだろう。安政大地震の様に、自分たちが経験することで初めて実感が湧くというのが普通である。仮に当該地域で販売されていたとしても、当時の江戸の社会背景でなければ爆発的に流行していた可能性はなかっただろう。鯰絵の大流行には、鯰絵が売られるのが江戸であり、且つ、地震を経験した江戸の人々の、地震を肯定的にも捉えるという特異性が必要だったのである。3つ目は、善光寺、小田原地震における鯰絵のレパートリーの少なさである。レパートリーが多いということは、人々はより飽きにくくなり、自分の好みのものを見つけられるということになる。では、安政大地震の鯰絵でレパートリーが多くなった要因について4つ述べる。Ⅰ、善光寺、小田原地震の後且つ安政大地震の前に黒船来航があったということ。この出来事によって、江戸の庶民は、これまでの社会的混乱や政治、生活の不安定さに、海外からの圧力まで加わることとなった。社会不安や混乱が一層増すことによって、江戸庶民の中に世直しという考え方が一層広まることとなり、それが鯰を救世主ととらえる構図の誕生にも繋がったのである。善光寺、小田原地震では鯰は懲らしめられ、制圧される対象であり、そこに救世主、世直しの考え方は見出せない。このように、政治の中心地であり文化の発達した江戸庶民独自のものの見方、捉え方というものが存在した。黒船来航が鯰絵に影響を与えているということ (⑭,p56~61) は、鯰絵の中にペリーが登場する (⑭,p327) ということ、黒船を連想させるような鯰が描かれているということからも分かる。黒船来航は、上でも述べたような、地震絵が売れるようになる特異的な状況の形成に大いに寄与していると言える。鯰絵が描かれ、販売されたのが江戸であったということは、鯰絵が爆発的に流行するのに必要な要素であったと考えられるのだ。Ⅱ、安政大地震が起きたのが、旧暦の神無月だったということ。当時、神無月には神々が出雲に赴き、その期間には自分の持ち場を留守にするという思想があった (⑤,p100)。この1つの要素は、とても重要であったように感じる。このことによって、鹿島大明神が留守にしているから地震が起きてしまったという様に考える人々が出てくる。地震という現象が、鹿島信仰、鯰だけでなく、神無月という要素を媒介にして、神々と結びつくことになるのである。留守神という観点は、エビスが登場する鯰絵の構図が生み出されるということに繋がる。また、地震を抑えられなかった鹿島大明神に代わり、伊勢神宮の神に助けを求めると

いう構図も生まれることとなる。善光寺、小田原地震のみならず、同じく江戸で発生した安政東南海地震と比較してみても、旧暦の神無月に地震が発生したという要素は安政大地震に独自のものである。Ⅲ、鯰絵の作者の才能。安政大地震の鯰絵の主要な作者としては河鍋暁斎、歌川国芳が思い浮かぶ。2人とも有名な絵描きであり、特に国芳は、上でも述べた通り大津絵にも関心を寄せていた。これによって、鯰絵のレパートリーが増えることとなった。また、国芳は鯰絵以前にもいくつかの作品が江戸で大ヒットしているので(⑩,p40~51)、鯰絵においてもヒット作を多く生み出していたらと想像でき、実際に鯰絵は江戸で大流行している。この2人の絵描きは鯰絵の流行に貢献していたはずである。国芳が鯰絵に手を出すというのは、大津絵に興味を寄せていたことの他に、すでに国輝が鯰絵を描いていたということから考えてみても必然的なことのように思われる。Ⅳ、安政大地震の鯰絵は、その目的も多様だということ。そのうちの1つに、御守としての役割がある。この機能は、善光寺、小田原地震では見られなかった。余震が続く中で、これ以上地震の被害にあうことがないようにと祈る気持ちから、御守の役割を果たす鯰絵を買い求めた者もいるかもしれない。ところで、安政東南海地震ではなぜ鯰絵が描かれず、それが描かれるのがなぜ安政大地震だったのかということについてはもはや確認のしようがない。しかし、私は、安政東南海地震では突然の地震に対応することができなかったのではないかと考える。安政東南海地震において、後の鯰絵関係者たちは、安政期における江戸庶民の地震に対する反応やその後の社会の動き方、庶民の民俗信仰を目撃することになったのであろう。そうした後の鯰絵関係者たちが、善光寺、小田原地震の鯰絵という着想を参考にしつつ安政大地震直後に鯰絵を描いたのではないだろうか。地震によって長者(新興の金持)が富を失うことになり、あまり恵まれない小商人や労働者などが儲けることになるという構図(⑤,p121、122)は、地震発生直後すぐに把握できることではない。地震発生からしばらく期間が空いてからようやく分かることである。しかし、安政大地震の鯰絵は(1番最初のものはこの構図を採用していないが)、翌日から描かれ始めている(⑭,p37、38)。ここで、安政東南海地震の重要性が見えてくるのではないだろうか。安政東南海地震によって、地震発生後の江戸庶民の反応、動向を把握できていたからこそ、それをもとに鯰絵が迅速に描かれていったのである。最後に、善光寺、小田原地震の鯰絵から推測できることについて述べる。まず、善光寺地震の鯰絵は国輝によって江戸で描かれたものという認識でほぼ間違いないだろう(⑭,p240)。そう考えると、当時の善光寺地域の信仰をそのまま反映しているとは考えにくい。また、善光寺地震の鯰絵で確認できる2種類の鯰絵はどちらも国輝作と考えられており(Ⅱ)、考察するには視野が狭められすぎているようにも感じられる。ただ、この鯰絵において、鯰を懲らしめる存在が阿弥陀如来であることから、江戸で描かれたにせよ、善光寺地域で描かれたにせよ、当時善光寺地域には鹿島信仰が分布していなかったと考えられる。なので、鯰を懲らしめる存在は地域ごとに差異があった(その地域で信仰されているものだった)のではないかと推察できる。江戸での鹿島信仰を、国輝が部分的に善光寺地域の信仰に置き換えて描いたとも考えられる。確実に読み取れることとしては、この時既に地震と鯰の結びつきは存在していたということである。小田原地震の場合、その構図から、当時すでに小田原には鹿島信仰が分布しており、鯰、鹿島大明神、要石、地震の結びつきが存在していたことが推測できる(⑭,p241)。鯰、要石、鹿島大明神は最初から結びついていただけではなく、龍からの変遷があるので、その時期や鹿島信仰の分布を考察する際にこの情報は重要になってくる。善光寺地震の場合と比較してみると、鯰を懲らしめる(抑える)存在が阿弥陀如来から鹿島大明神に置き換わっていることから、地域ごとの信仰の差異を見出すことも出来る。

次に、後者について考察する。まず、善光寺、小田原地震の鯰絵は(善光寺の場合は国輝と言ってもよいと思うが)、鯰絵という発想の部分で安政大地震の鯰絵に大きな影響を与えていると考えられ

る。また、詞書の面でも影響を与えていると考えられる。善光寺、小田原地震の鯰絵では、御守の機能を果たそうとしたものは見出せないが、地震の状況を詞書に含んで伝えているものがある。この要素は、安政大地震の鯰絵にも引き継がれている。前 2 つの地震鯰絵では、その速報性に重きが置かれていたのかもしれないと推測することもできる。しかし、江戸の特殊な社会的状況と絵描きの才能から、安政大地震の鯰絵では、本来意図されていたものとは異なった多彩な形式へと発展していったのかもしれない。さらに、小田原地震の鯰絵での鯰、鹿島大明神、要石、地震の結びつきが安政期の鯰絵に引き継がれた可能性は高い。安政東南海地震では、後の鯰絵作者が、後に鯰絵に描き出されるいくつかの構図を実際に目撃することになったという意味で重要である。これに関しては、上でも述べた通りである。安政大地震の鯰絵作者が、少なくともこれらの地震を意識していたであろうということは、鯰絵の構図からも分かる。その構図とは、擬人化した安政大地震の鯰が、同じく擬人化した善光寺、小田原地震の鯰とともに描かれている構図などである (⑩,p19~21 など)。また、詞書で、安政大地震以前に起こった地震についても弁明しているという構図もある (〃)。

⑤ 反省点と今後の課題

最後に、本研究を終えてみての反省点と、今後の課題について述べてこの研究を締めくくることとする。まずは反省点についてである。反省点は 2 つある。1 つ目は、文献から得られた情報に関して、全ての正誤を考慮することができなかったということである。明らかにおかしいと考えた内容や、いくつかの文献の中での矛盾に対しては考察を加え、情報の矛盾が発生した理由や情報の正誤について考えた。しかし、全ての情報に対してそれができたわけではない。その理由は、私の時間調整の見通しが甘かったことである。研究テーマを古代から現代までとして広くしすぎたこと、基礎的知識を蓄えるまでに多くの文献を読む必要があったことを考慮しておくべきであった。研究テーマの設定については、今後活かしていきたい。2 つ目は、古文書など、漢文やくずし字で書かれた文書で、原文を読めないものがあったということである。これによって、文献を遡るということにも限界が生じてしまった。1 つ目の反省点とも関連するが、他の研究者の見解を参照するに止まってしまった部分もある。このことは、私の知識不足が原因であり、鯰絵の詞書においても原文は読めないものがほとんどだった。2 回生からの演習で知識を蓄えたうえで、これからの研究では原文を検討できるようにしたい。次に、今後の課題についてである。今後の課題は、以後の研究において、上で述べた反省点を繰り返さないようにするということである。今後考察を加えていきたいことに関しては以下の 3 つである。1 つ目は、鯰絵馬に関することである。ナマズハダは、平安時代中期には既に確認されている (④,p168、169)。しかし、鯰絵馬については、文献に現れるのは 1821 年が最も古い記録とされている (④,p173)。この時間差が何を意味し、どうしてこのような時間差が生まれることになったのかということについて考察したい。そもそも、この文献情報が誤っている可能性もあるので、そこも踏まえて考察したい。2 つ目は、同時代における、地域ごとの鯰信仰の差異と、それが生じるようになった要因についてである。このことは、考察してみたいことの 3 つ目と関連させて考察したい。3 つ目は、人々が、地震を起こすと考えていた存在の変遷についてである。多くの文献を読みながら、この点についても情報収集を進めた。しかし、この問いについては、一貫して上手くまとめられており、納得できる先行研究が存在しなかった。また、この問いに関しては、鹿島信仰の変遷、分布とも関連させる必要があるだろう。というのも、鹿島信仰は初期から庶民的であったわけではなく、鹿島大明神、鯰とも結びついていなかった (⑩、⑪)。龍→鯰への変遷に鹿島信仰の変遷が関係していたことは間違いない。私自身本研究を進める中で大方考察を加え終えたのだが、以下の点から、この研究内ではその考察を記述しないこととする。まず、字数の関係である。ここでさらにこの考察を加えてしま

うと、字数が多くなりすぎてしまう。次に、この問いに関してはより深く考察してみたいと考えたからである。より深くとは、原文も読みながら考察を深めていきたいということである。また、より多くの時間を費やしてじっくりと考えてみたいということでもある。なので、機会があれば、この問いに関しては、1つの大きなテーマとして来年の自主研究で取り組んでみたいと考えている。また、来年も研究を続けることになれば、さらに知識を蓄えたうえで、今年考察したことに関しても見解を深めていきたい。

引用・参考文献

- [1]国立国会図書館 東日本大震災アーカイブ、地震年表（最終閲覧日 2021 年 12 月 9 日）
<https://kn.ndl.go.jp/static/ja/edoeearthquake.html>
- [2]東京都島しょ農林水産総合センター、ナマズ（最終閲覧日 2021 年 12 月 9 日）
<https://www.ifarc.metro.tokyo.lg.jp/archive/27,941,55,225.html>
- [3]矢野憲一『魚の文化史』（講談社,2016）
- [4]秋篠宮文仁、緒方喜雄、森誠一編著『ナマズの博覧誌』（誠文堂新光社,2016）
- [5]C・アウエハント『鯰絵 民俗的想像力の世界』（岩波書店,2013）
- [6]武者金吉『地震なまず』（明石書店,1995）
- [7]黒板勝美『増補新訂 國史大系 1 上 日本書紀 前篇』（吉川弘文館,1966）
- [8]黒板勝美『増補新訂 國史大系 1 下 日本書紀 後篇』（吉川弘文館,1967）
- [9]荒木精之『阿蘇の伝説』（日本談義社,1953）
- [10]半田隆夫『神神と鯰』（1996）
- [11]西山吉之助『民話と伝説：ふるさと学習』（高田町教育委員会,1993）
- [12]細田博子『鯰考現学 その信仰と伝承を求めて』（里文出版,2018）
- [13]友田淑郎『琵琶湖とナマズ：進化の秘密をさぐる』（汐文社,1978）
- [14]宮田登、高田衛監修『鯰絵 NAMAZU-E 震災と日本文化』（里文出版,1995）
- [15]芳沢勝弘『「瓢鮎図」の謎 国宝再読 ひょうたんなまずをめぐる』（ウェッジ選書,2012）
- [16]季村範江『サザエさんたちの呼びかけ：阪神大震災・瓦版なまず集成 1998-2008』（震災・まちのアーカイブ,2008）
- [17]国立歴史民俗博物館『特集展示 黄雀文庫所蔵 鯰絵のイメージーション』（歴史民俗博物館振興会,2021）
- [18]茨城県立歴史館『学術調査報告書Ⅷ 鹿島信仰の諸相』（茨城県立歴史館,2008）
- [19]茨城県立歴史館『特別展 鹿島信仰一常陸から発信された文化一』（茨城県立歴史館,2004）